

一九六〇年代初頭の大江健三郎と 広島の関係をめぐる一考察

— 『中国新聞』と『世界』に注目して

山本 昭宏

はじめに

『ヒロシマ・ノート』の目次を開くと、プロローグのあとに「広島への最初の旅」という章が置かれているのが目に入る。この章は、初出時には「広島1963年夏」というタイトルで『世界』（一九六三年一〇月号）に掲載されたものだ。タイトル変更の理由はわからないが、初出時のタイトルはやや地味であり、岩波新書に収録されるタイトルミングで「広島への最初の旅」に変更されたものと推察できる。

ここで注意を喚起したいのは、大江が広島を訪れたのは一九六三年が初めてではない、ということだ。大江が小説家として、いわば公式に初めて広島を訪れたのは、一九六〇年だった。大江が、一九六〇年の広島訪問ではなく、一九六三年のそれを「最初の旅」

とした理由はどこにあるのだろうか。タイトルの変更は大江の意図ではなく、岩波新書の編集者（あるいは『世界』の連載を担当していた安江良介）の意図だった可能性もあるが、仮にそうだとしても、広島への「最初の旅」が一九六〇年ではなくて一九六三年になった理由を考えてみたい。

大江健三郎研究の厚い蓄積のなかで『ヒロシマ・ノート』を論じるものが多いが、一九六〇年の広島訪問に焦点を絞った論考は管見に入らない。それは、大江にとつて一九六〇年の広島訪問が取り立てて論じるほどの影響がなかったと考えられてきたからかもしれない。それを検証するためにも、拙稿では、まず一九六〇年夏の『中国新聞』から、大江の足取りと発言を追う。そこから、一九六〇年当時の大江の認識を取り出し、『ヒロシマ・ノート』と比較しつつ、

岩波書店に注目して大江との関りを仮説的に論じる。なお、本稿は論考というよりも情報提供としての側面が強いことを最初におことわりしておきたい。

1、「前史」としての一九六〇年——『中国新聞』の報道から

一九五八年一月、「若い日本の会」が結成された。主要メンバーは、江藤淳、谷川俊太郎、石原慎太郎、大江健三郎、寺山修司、浅利慶太、永六輔、黛敏郎、福田善之、曾野綾子ら若い表現者・芸術家たちだった。この会は、入会も退会もまったく自由という方針を掲げており、対象を問わずに世代的主張を行うグループだった。政治的には、警察官職務執行法の改正に反対し、文化的には同時代の文化・芸術に「停滞」を見出す議論を続けていた。

「若い日本の会」の存在は、各地の若い知識人や文化人たちを刺激した。その一つが「若い広島の会」である。世話人代表には松元寛があり、小久保均や広岡尚利らが集った。「若い広島の会」と「若い日本の会」をつなげたのは、広島出身の作家・桂芳久である。報道によれば、「若い広島の会」は一九六〇年四月に桂芳久を通して「若い日本の会」に広島来訪を打診している^①。「若い日本の会」のメンバーは自費での広島訪問を引き受けたが、江藤淳は病欠、石原慎太郎は映画撮影と重なり断念した。結局、大江健三郎、城山三郎、開高健、桂芳久の四名が広島を訪問することになり、一九六〇年八月六日に広島に到着した。

一行の足取りは『中国新聞』が詳しく報じている。まず平和式典に参加、その後、原爆資料館と平和公園周辺を見学した。翌七

日は、広島市雑魚場町教育会館でシンポジウムに登壇。このシンポジウムには同タイミングで広島にいた堀田善衛も参加した。シンポジウム後は、基町児童文化会館で講演会が開催された。

『中国新聞』は、八月六日の大江の様子を次のように報じている。

一行は原爆資料館の陳列をみて大変なショックだったらしく、感慨深げに係員の説明を聞きついていたが、なかでも一番年少の大江氏は「私は仏教徒ですから」と線香と花束を買って慰霊碑にそなえて合掌したり、とうろう流し用のとうろうを買って「献灯」したりしていた。^②

この経験に基づいて、大江は一九六〇年八月七日付の『中国新聞』に寄稿している。紙面の一面に掲載されたもので、扱いは大きい。以下の引用は、大江の文体とは異なるようにも思えるが、七日の朝刊に掲載されたことを考慮すれば、記者がまとめた談話記事の可能性もある。やや長くなるが引用しよう。

私は広島で、原爆と戦いつづけながら日常生活をきずいている、勇氣にみちた人たちを見た。それは土門拳の「ヒロシマ」で私が発見し、深い敬意をはらっていた人たちを、現実に見ることであった。そしてまた私は、納骨塔の前で会った母親のように、深く暗い海のような悲しみと嘆きをもつ人たちをも見たのである。

この二つの人間像が広島の人たちを代表するものであろう。私はこの勇氣ある人たち、しかも深い悲嘆を心にいだきつづ

る優しさをもった人たちを、おなじ日本人としてもつことに誇りを感じる。

原爆資料館で、私は被爆後の広島の上に育ったオオイヌフグリやハコベの標本を見た。それはあらゆる草の葉が美しいように美しかったが、ひどく傷ついてもいた。それはまた広島の人たちの心でもあるだろう。

もし広島市の被爆者たちが、暗い穴にとじこもるような生活をしていられるとしたら、私は心からこう申したい。一人ぼっちの不幸な穴ぼこから出て、私たち日本人みんなの友情の輪の中にはいつてくさいと。私たち日本人みんな、広島の人たちに深い責任がある。そしてまた、この歴史始まって以来の不幸に耐えた広島の人たちは、私たち日本人みんなの良き師であるだろう。ぜったいに原爆孤児をもう一人自殺させたりしてはならない。

広島を訪れた皇太子は、秋にアメリカをおとすられる。どうかアメリカの政治家たちに、私たち日本人の広島をめぐる深い祈りをつたえていただきたい。私は期待する。⁶⁾

引用文にみられる「勇気にみちた人たち」と「悲しみと嘆きをもつ人たち」への注目は、特段珍しいわけではないが、『ヒロシマ・ノート』を経て大江の文学に取り入れられる主題を先取りしていることを受け止めることができる。また、「広島の人たち」を「私たち日本人みんなの良き師」だとする認識や皇太子への「期待」は、「唯一の被爆国」認識と通底するところがあり、ナショナルリズムの問題に無自覚だと指摘できるが、それも当時としては珍しくない。これ

らの論点は、『ヒロシマ・ノート』にもそのまま受け継がれている。気になるのは、「一人ぼっちの不幸な穴ぼこから出て」という表現は、当時の大江らしい物言いだが、ある意味では被爆者との距離を感じさせ、やや単純化しすぎているように読めるということだ。『ヒロシマ・ノート』ではこうした簡素な表現はほとんどみられないが、広島に到着したばかりの若い作家が、慌てて感想をまとめなければならなかったという限界があったと理解すべきだろう。

ここで指摘した一種の「距離」は、「若い日本の会」のメンバーにもある程度共有されていたようだ。八月一二日付の『中国新聞』には、来訪したメンバーに堀田善衛を加えた座談会が掲載されているが、ここでは「東京と地方」というテーマをめぐって、次のようなやり取りがあった。

大江

広島には原爆というスバラシイ文学的素材がある。名古屋とか九州とか、特殊性の全くない地方とちがっています。広島の人には文学するにはめぐまれていますよ。

開高 だから観念的な論議はやめにしてどんどん書かなければ……。

城山

文学のはじめは「くそリアリズム」なんだからね。それでやっていって、今度はそれを克服することが大切。

開高 地方性は東京の地方性にも通じることだと僕は思っている。地方で文学は不毛だ、とよく聞かされるけどそれは東京の不毛にも通じていることだ。

堀田

いままで広島の人たちがやってきた仕事を一つにまとめて出版するのはいいことだとおもう。小説や詩のアンソロ

ジューをつくればいい。本を売ったり、PRのお手伝いならさせてもらうから二貫五〇〇円くらいもある大きいのがほしいよ。

開高 一つのテーマをめぐる感情が——たとえば原爆論争がそれだが——一五年間も残されているところは広島しかない。強烈な地方性だ。

桂 決定的に広島人になることだね。

大江 ぼくは地方の若い人のだれにでも小説を書けと、進めることはできないが、広島の人には進められます。原爆を書くということは大切なことですから。

城山 地方主義の文学は原田康子の「挽歌」のような型で出てくるのが普通だけど広島では新しい型が出てくる可能性があるがあるものね。

大江 ぼくたちも月に一度くらいは原爆ものを読む必要があるよ。作品は残らず送ってくださいよ。

開高 アンソロジーを出すときには、ぼくでよかつたら推薦文を書かせていただく。本当に。

原民喜や大田洋子については触れられていないので、発言者たちは原爆を描いた「新しい」文学が広島から登場することを期待しているのだろう。大江は広島を「文学するにはめぐまれています」と述べるが、紙幅が限られた座談会であるためその真意は不明である。しかし、『ヒロシマ・ノート』を読んだあとに、この発言を目にするのと、いかなる理由であれ「めぐまれています」という表現に、やや唐突な印象を受ける。

以上、『中国新聞』に掲載されたエッセイと座談会を確認したが、取材から記事になるまでの時間が短い当時の新聞記事の特性を考慮しても、また大江が当時二五歳の青年作家であることを勘案しても、大江の発言は無邪気で素朴である。本稿は無邪気さや素朴さを問題化するのではなく、むしろ『ヒロシマ・ノート』にも引き継がれる要素として確認しておきたい。

それよりも、一九六〇年八月に広島を訪れた大江が、その後継続的に広島の問題に取り組んだわけではないということが、本稿にとつては重要である。もつとも、『毎日グラフ』の一九六一年八月六日号で、大江は広島・長崎の被爆者と鼎談しており、関心を持続させていたということができるが、『ヒロシマ・ノート』に結実する長期間の取材とは温度差がある。

以上から、『ヒロシマ・ノート』に収録されたルポルタージュと、それ以前とでは原爆と広島という問題に向き合う大江のなかに、認識の転換があったと言える。では、大江に認識の転換をもたらしたものはいったい何だったのか。

大江健三郎の来歴を知っている者や『ヒロシマ・ノート』を読んだことがある者ならば、この問いに答えるのは容易だと感じるかもしれない。認識の転換をもたらしたのは、一九六三年六月に誕生した長男だと答えるのではないだろうか。

2、『ヒロシマ・ノート』の位置——外在的アプローチから

一九六三年六月、大江健三郎の長男、光が誕生した。彼は頭蓋骨に異常があったため、出生直後に手術を受けている。以後、大江

は小説やエッセイで、この長男との関係を書き続けてきた。九〇年代以降は、NHKのドキュメンタリーの影響もあり、親子関係は誰もが知るところとなった。

大江が『世界』のために広島取材したのは、長男誕生直後である。乳児の時点で頭蓋骨を手術するという長男が負った物心両面の傷と、広島への原爆投下がもたらした巨大な傷。両者が大江の内部分で何らかの関係を持つようになったとする理解が一般的だ。それが大江の広島との関わりを、それ以前とは異なるものにしたという理解である。本稿もその理解に異存はない。それよりも、『ヒロシマ・ノート』が戦後日本における広島原爆関連の著作のなかで突出した位置を占めるに至った要因を探りたい。

そもそも、一九六三年の時点で、全国に流通する雑誌に継続的に広島関係のルポルタージュが掲載されるということ自体が稀であった。以下では、新聞や週刊誌とは異なり一定の分量を掲載可能な総合雑誌に限って、一九五〇年代後半から一九六〇年代前半の誌面に掲載された広島関連の記事を拾ってみよう。

『中央公論』は、藤島宇内「ヒロシマ……その後」（一九五八年八月号）、金井利博「広島二十年の傷痕」（一九六五年九月号）。『文藝春秋』は広島関連で目立った論考が少ないが、あえて挙げるならば、重藤文夫「生きているヒロシマの悲劇」（一九五五年八月号）、R・ユンク「ヒロシマで会った人たち」（一九五七年七月号）。他方で『世界』は、土門拳「理由のない恐慌——13年後の広島」（一九五八年九月号）、山田国男「十七年目の広島」（一九六二年九月号）、小西信子「広島への慰霊碑——宮本さんのことを思いながら」（一九六四年八月号）、今堀誠二「原水禁と被災白書の運動」（一九六五年三月号、今

堀は一二月号にも寄稿）などがある。

夏に単発で原爆関連の論考が載るという言論環境は現代と変わらないが、上記のリストに以下の大江のルポルタージュを置けば、その量的突出が目瞭然だろう。

(1) 「広島1963年夏」一九六三年一〇月号

(2) 「広島再訪1964年夏——ヒロシマ・ノート1」一九六四年一〇月号

(3) 「モラリストの広島——ヒロシマ・ノート2」一九六四年一月号

(4) 「人間の威厳について——ヒロシマ・ノート3」一九六四年一二月号

(5) 「屈伏しない人々——ヒロシマ・ノート4」一九六五年一月号

(6) 「ひとりの正統的な人間——ヒロシマ・ノート5」一九六五年二月号

(7) 「広島へのさまざまな旅——ヒロシマ・ノート」一九六五年三月号

これは大江の希望だけでなく、安江良介を含む『世界』編集部「戦略」だったと理解すべきである。また、実際には、連載と言えるのは一九六四年一〇月号からであり、(1)と(2)の間には約一年の隔たりがある。

この一年の隔たりは、これまでの大江論ではほとんど指摘されていないが、見逃すことのできない要素を内包している。この一年のあいだに、大江は原水禁運動との距離を明確に意識するようになったと考えられるからだ（もちろん、その萌芽はすでに一九六三年の時

点であきらかである)。具体的には、志賀義雄と大江の対談を確認するのがわかりやすいだろう。

『文藝春秋』一九六四年七月号に掲載された対談「日本共産党に訴える」で、大江は志賀義雄と対談している。対談のなかで、大江は志賀に対し、原水禁運動と部分的核実験禁止条約をめぐる日本共産党の方針と志賀自身の態度に切り込んでいく。志賀は部分的核実験禁止条約を支持して共産党を除名されたが、大江はなぜいまさらになつて態度を変えるのか、もつと早く支持していれば、原水禁運動の分裂は緩和されたのではないかと問いかけている。大江は、分裂の主要な要因として共産党の態度を問題視しているわけだが、志賀はそれに納得のいく応答をしていない。大江はこれでは原水禁運動に肩入れするのは難しいと感じたのではないだろうか。

『ヒロシマ・ノート』が注目したのは、これもよく言われることなのだが、広島の人々の実践だった。雑誌『ひろしまの河』の紹介とそこから引用、宮本定男・小西信子・金井利博・重藤文夫らの紹介、そして人びとの噂話・逸話などに、大江のルポルタージュのスタイルがよく表れている。

なお、岩波書店は一九五〇年代以降の『世界』の編集・発行を通して、「特定の党派や政党については是々非々で議論するが基調は革新」という態度を定着させ、戦後日本の言論界で独自の位置を占めたが、原水禁運動からより個別の人びとの取材へという大江のルポルタージュの方針転換は、結果的に岩波書店の方向性と合致するものだったと言える。

雑誌『世界』内部での相互言及についても、確認しておこう。小西信子「広島の慰霊碑——宮本さんのことを思いながら」(『世界』

一九六四年八月号)では、次のように大江のルポルタージュが引用されている。

この時の宮本さんの症状はもう極度に悪化し、片方の脚は大砲の筒のように腫れ、皆の止めるのもきかず、数人に支えられて三階の病棟から玄関に出て平和行進団の挨拶に応えられたのでした。この情景に接した作家の大江健三郎さんは、「……蚊のなくような声で演説をはじめ。陽に灼けたコンクリートの上で懸命に。しかし出発をうながすスピーカーの音がそれをかきみだしてしまふ。僕は辛うじてこんな結びの言葉を聞く《第九回世界大会の成功を信じます》」と書いておられます。(『世界』三八年一〇月号)⁶⁾

広島文化運動に関わってきた小西が引用したいと思えるほどに、大江のルポルタージュが質的なインパクトを与えたのか、あるいは亡くなった宮本氏を顕彰するために言及された例を挙げたかったのか、詳細はわからない。大江はルポルタージュのなかで『ひろしまの河』を丁寧で紹介していたが、今度は『ひろしまの河』に関わる小西が大江を引用するという相互言及があったという事実は、雑誌『世界』のなかで広島の人びとの実践が数ある主題のなかでもとりわけ重要なものとして浮上していたことの傍証にはなるだろう。

おわりに

以上からは、大江の『世界』連載の量的突出のみならず、大江

の思想形成においても一九六三年以降の断続的な広島とのかわわりが、重要な役割を果たしたことがうかがえる。そしてその前史として、一九六〇年の広島訪問があったということも明らかになった。

『ヒロシマ・ノート』が発行された一九六五年以降、大江は岩波書店の人的ネットワークとともに、広島に関わり続けた。たとえば、一九六五年に日本被団協が被爆二〇周年事業として、原爆関係文献の収集事業を始めたが、大江は吉野源三郎（当時、岩波書店編集長）とともに呼びかけ人となっている。同年には、広島原爆病院へ「見舞金」として三〇万円を、原爆被災白書運動の資金として二〇万円を寄付すると発表している。

こうした展開については、中国新聞社の金井利博や岩波書店の『世界』編集部の間与があったと思われる。作家と出版社の関係解明というメディア史・文化史的課題を念頭に、今後も調査を続けていきたい。

【謝辞】拙稿の準備段階の調査では、中国新聞社論説委員室の宮崎智三氏のご助力をたまわりました。記して感謝申し上げます。

注

- 1 桂芳久「友情の共和国 8・6記念日の広島を訪れて」『中国新聞』一九六〇年八月二一日、六頁。
- 2 「原爆資料にシヨック 「若い日本の会」の4氏が来広」『中国新聞』一九六〇年八月七日、一一頁。
- 3 大江健三郎「ヒロシマ一九六〇」『中国新聞』一九六〇年八月七日、一頁。

4 「『文学』放談会 “若い日本の会”のメンバー 原爆はりっぱな素

材 広島の人は大いに書け 地方の不毛は東京の不毛に」『中国新聞』

一九六〇年八月二二日、五頁。

5 小西信子「広島の慰霊碑——宮本さんのことを思いながら」『世界』

一九六四年八月号、二六〇頁。